華やかな荒野

○石松愛弘

三笠書房

定価　六八〇円
第十刷　一九七五年二月十五日
著者©石松愛弘
発行者　竹内肇
発行所　三笠書房
東京都新宿区戸山町三五番地
電話東京〇三(二〇三)七七八一〈代表〉
振替口座東京二二〇九六
郵便番号一六二
誠宏印刷／松本製本

＊検印省略

華やかな荒野

0093-00107-6-8937

＊落丁・乱丁本は本社
またはお求めの書店で
お取替えいたします。

華やかな荒野

石松愛弘

三笠書房刊

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

華やかな荒野　目次

1 軽井沢旅行 9
2 ゆらめき 30
3 事業開発室 44
4 二つの炎 63
5 口づけ 84
6 脅迫 107
7 生と死 132
8 波紋 150
9 和解 173
10 選択 185
11 別れ 202
12 圧力 214
13 きずな 229
14 華やかなるもの 243

1 軽井沢旅行

振り向くと、南欧風の駅舎にレンガ色の屋根がよく似合い、青い空が眼に沁みた。

「すてきだわ！」

連れの幸恵はうっとり眺めて動かない。なるほど、都会のコンクリートの駅ビルか田舎の簡素で不愛想な駅舎しか憶えのない眼には、軽井沢駅のロマンチックな装いは、古びた日本人形とは、どの違いがあった。

なるほど　いま着いたばかりの若者たちの装いも、トラベルウェアにしては大胆で、華やかだ。彼らの上部分は貸自転車に殺到して、自転車にまたがり、思い思いに散っていく。ファッショナブルな色彩が行き交い、まるで赤トンボの群である。滝村達也も間もなく彼ら同様、幸恵と並んでライスイ自転車のペダルを踏んでいた。まわりは車中で幸恵に見せられた雑誌の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

グラビアそっくりの光景だ。ついさっきまでの雑誌の読者が、ここではたちまち主役である。そのせいか、行き交う若者たちのどの顔も晴れがましく、微笑が溢れて、ペダルを踏む足も軽そうだ。幸恵が彼らと同じ微笑をみせて振り向いた。

「いい気持ね、生き返ったみたい」

達也は苦笑しながら、ふと幸恵を抱きしめたい欲望に駆られた。それは自分でも思いがけない新鮮な衝動であった。

滝村達也と内川幸恵は交際を始めて、やがて二年になる。高校卒の幸恵はそろばんの巧いのを見込まれて、入社以来経理部で給与計算のベテランだったが、会社にコンピューターが導入されて、その腕前も目立たなくなった。達也と知り合ったのはそんな時である。達也の行きつけのスナックで、幸恵は珍しく酔っていた。仕事が楽になっても悲しいと、会社ではいつも明るい彼女が涙ぐんでいた。その心情に達也はふと惹かれて、彼女をアパートまで送ってやった。親しく付き合うようになったのはそれからである。そして半年後には、お互いに結婚を約束し合うほどになっていた。

正式に結婚するのは来年秋の予定である。挙式の費用、新居や家具などにかかる資金を貯えるには、幸恵の計算によると、まだあと一年は必要だった。そろばんの達者な幸恵らしいプランにしたがい、達也も給料から月々、かなりの金額を積み立てていた。

今度の軽井沢旅行も、幸恵が春から計画していたもので、費用はそれぞれ夏のボーナスから出し合い、足の出た分はとりあえず幸恵が立て替えて、来月の給料で精算することになっていた。達也は自分のポケット・マネーで補うつもりだったが、幸恵はあいまいな出費を嫌がり、

自分のプランで押し通した。それはそれで達也には気楽であった。サラリーマン生活六年では、幸恵の細かい感覚をとがめるほどの余裕はないし、結婚してからの生活を考えると、幸恵に任せておけば安心だという気持もあった。

軽井沢滞在は二泊三日。泊まりがけの旅行は二人にとって初めてである。そして今夜初めて二人は結ばれるはずであった。結ばれるチャンスはこれまでにも何度もあったが、幸恵にはいつもためらいがあり、達也も強いて求めようとはしなかった。

「いいかげんで与えないと危ないわよ」

男なんて牡だからと、会社のハイミスに幸恵は忠告されたことがある。だが、幸恵は決して達也に与えるのが惜しいわけではない。結婚まで大事にとっておくつもりもなかった。ただ達也のアパートや連れこみまがいの場所ではあまりにありふれて、踏み切れなかっただけである。最初の体験だけに、彼女は想い出しても悔いのないものにしておきたかった。その点軽井沢なら申し分なく、想い出もすてきなものになるはずだった。幸恵はこの春三月、旅行を計画した時から今日のこの日を待ち望んでいた。

駅から間もない軽井沢銀座は若者たちであふれ、赤坂、原宿、六本木あたりのファッションを一堂に集めたような賑わいであった。しゃれたブティックやシャンゼリゼ風の喫茶テラスなどが、東京の有名店の出店と並んでひしめき合っているさまは、東京の目ぼしいところを寄せ集めて、箱庭にしたような感があった。

「まるで歩行者天国だな、東京の」

「そうかしら……」

「見ろよ、店だって知ってるとこばかりじゃない」
「でも、やっぱりちがうわよ、雰囲気が……」
「ほら、あそこもバーゲン、こっちも安売りだ。軽井沢まで来てバーゲンだなんて……」
「夢がないのね、あなたって……ここは軽井沢なのよ」
幸恵にそういわれると、達也も強いて逆らう気もしない。
毎年、夏シーズンが近くなると、雑誌や週刊誌はきそって軽井沢の記事を書きたてる。有名人の別荘紹介、落葉松やポプラ並木のサイクリング、クラシックな情景をバックにしたハイ・ファッション——それらは海や山の情報などとは比較にならぬほど優雅で高級なイメージにあふれていて、たちまち読者を虜にしてしまう。
幸恵も同様で、旅行に出る以前に軽井沢を知りつくし、長いあいだ夢をふくらませていた。それでいながら実際の風景を目のあたりにするのは、また新たな喜びがあるらしい。幸恵はガイド・マップと照合しながら、まるで思いがけない発見でもしたかのようにいちいち感嘆の声をあげていた。
軽井沢銀座を北へ抜け、観光会館を右へ折れると、間もなくテニスコートに突き当たる。美智子妃殿下と皇太子のテニスで一躍軽井沢の名を高めた軽井沢会のテニスコートである。落葉松並木を背景にいくつも並んだコートに白球が飛び交い、白いユニホームが入り乱れていた。
「やっぱりうまいわね。どんな人たちかしら？」
「さあ……」
気のせいか達也の眼にも、コートの連中がいかにも育ちが良さそうで、品よく見える。張り

めぐらされた金網付近をうろついている旅行客とは、やはりどことなく違って、軽井沢という土地にすっかりなじんだ感じである。
達也は彼らを眺めている自分が何となくうとましくなった。幸恵は金網にへばりついて、カメラを向けている。
「行こうか」
「あら、もう？……まだいいじゃない」
「他人のやってるのを見てたってしようがないだろ」
「でも、ここは美智子さまと皇太子が……」
まるで達也の無知をとがめるような口調である。達也はあきらめて、コートに背を向け、タバコをくわえた。すると、思いもよらずコートの中から名前を呼ばれた。
「滝村さーん」
滝村と幸恵がビクッと振り向くと、息を切らして金網のすぐそばまでボールを追ってきた少女が、汗びっしょりの顔を向け、眼を円くしていた。
「あら、やっぱり滝村さん」
「やあ、お嬢さん……いらしてたんですか」
「びっくりしたなあ、滝村さんがこんなとこで見てるなんて」
少女は達也の会社の文書課長、野見山重信の娘美穂であった。達也は総務課員だが、野見山とは同じ総務部というだけではなく、会社のサッカー同好会の仲間でとくべつ親しく、野見山家にはいつも出入りして、ご馳走になっていた。

美穂はその一人娘で、この春、女子大に入学したばかりであった。
「どうしたの？　美穂」
「すみません、知合いなんです」
美穂はまだ肩で息をしながらとぎれとぎれにいうと、ペロッと舌を出して達也たちに笑いかけた。
「ああ助かっちゃった、ほんとに殺されるとこだったわ」
達也はコートの中の見物席で、幸恵を美穂に紹介し、美穂からテニスの相手の女性を紹介された。美穂と違って大して汗もかいていない。眼のきれいな優しい顔で、無造作に束ねた長い髪が風にゆらいでいた。
「こちら井村博子さん、大学のテニス部の先輩なんです」
達也は、博子の前でひどく神妙な美穂がおかしかった。
「先輩ですか、道理でしごかれてたわけだ」
「あら、そんな……わたしのほうから特訓をお願いしたんだから」
美穂がムキに弁解すると、博子がにこりとした。
「無理しなくていいのよ、息抜きできて助かったでしょう」
見抜かれてシュンとした美穂を見て、博子が白い歯をみせて笑った。口もとにいつも微笑を浮かべているのが、育ちの良さをしのばせて快かった。
その博子がコートへもどると、穏やかな表情とは似てもつかない厳しい攻撃で美穂を圧倒した。強烈なスマッシュを容赦なく決められ、美穂は球を追うのが精いっぱいで、たちまちふら

ふらになった。幸恵が声援を送ると、美穂も振り向き、笑顔で応えたが、その顔は息が切れてベソをかいていた。

幸恵はくすくす笑い出した。

「ダメねえ、彼女」

「キャリアがまるでちがうな」

「そうねえ、素質ないのかしら？　彼女」

「いや、相手のほうが強すぎるんだ、少なくとも十年はきたえてるね」

「十年？……あなたテニスのことがわかるの？」

達也のサッカーも高校以来だから、キャリアはもう十年を越える。サッカーとテニスの違いはあっても、博子の軽やかな身のこなしとテクニックは、達也以上のキャリアと鍛錬を重ねているはずであった。達也は自信を持ってそういえた。

幸恵は達也の説明を素直に聞いていた。彼女はそろばんなら誰にも負けないが、スポーツは何をやってもダメであった。

達也のサッカーはキックが正確で、動きにもムダがなく、派手さはないが、チームには貴重な戦力だと幸恵は聞いていた。それは彼の性格をも適切にいい当てていた。幸恵との恋愛にしても、小説や映画で描かれるような熱烈なものではなかったが、彼は疑いもなく幸恵を愛していて、遊び半分という気持などまるでなかった。だから達也にプロポーズされたときも、幸恵は別に驚きもせず、当然のこととして聞き、それを受け容れたのである。

夫として達也は頼り甲斐のあるいちばん安心なタイプであった。幸恵はそんな彼にめぐり合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.